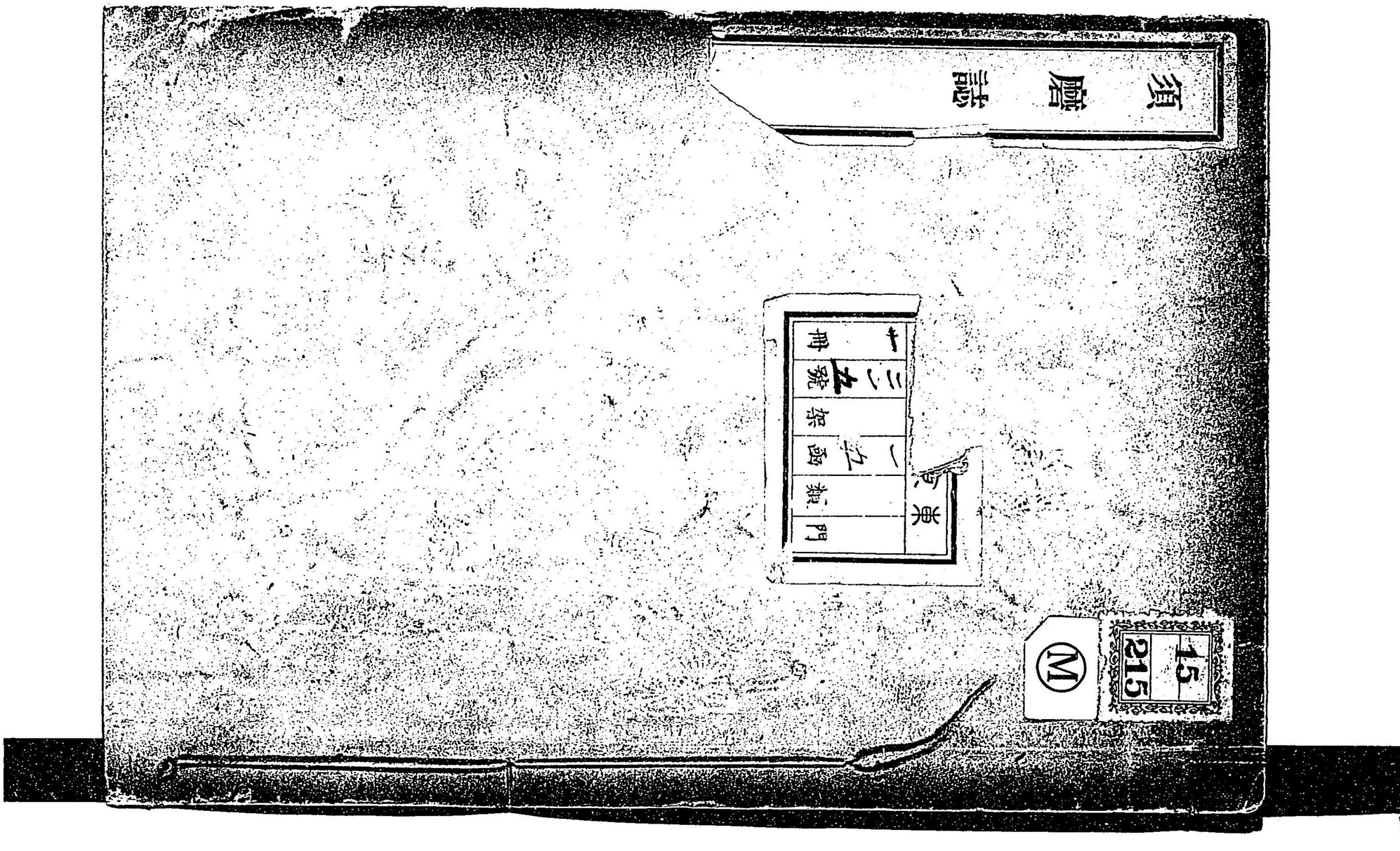

須磨記
東
門類函架號冊
一乙
十二
15
215

須磨誌序

上原君所著須磨誌一卷借覽數日來卒業而返焉余買船往還浪花神月者不知其幾回而每望青松白沙于波光艶瀲之間未能縱觀其風景也距今三年發神戸將

東京圖書館藏

赴岡山亦以在瀛車中唯看松飛
沙奔而已猶未卒業而返本誌也

讚岐

赤松渡撰

凡例

一世に攝津名所圖解須磨の栞あり此編無用に似たりと雖とも一つは繁よ過ぎ一つは簡よ渉り詳略其宜きを得ざるの憾なき能はざ此書は彼是の中庸を採るものなり

一世の勝譜古蹟誌は牽强附會乃傳說を直寫して其實際を示さるもの稀れなり此書は其正邪を明かみせんことを務めたり然れども徒よ筆誅を加へて快と爲すものみあらざ

一書中鵜越の一項を加へ須磨以東を附記するが如れ須磨以外のことを載せたるは歷史の關係順路乃便より編入れるゆ止を得ざるみ出づ

一順路として舞子明石乃事抜記せざるは須磨旅客には甚だ不便なれど別に舞子明石誌を編纂せんと欲せばかり

一編者の淺學なる書中或は誤りなきを保せず願くは大方の教示を俟つ且古今諸大家乃詩歌遺漏尠からゝ他日改版拔期し猶捜索記載すべし

一此書を編纂するゆ際し西須磨村直井元右衛門氏專ら助力を與へられさり茲ゆ其勞拔厚謝ゝ

明治廿六年四月

編者識

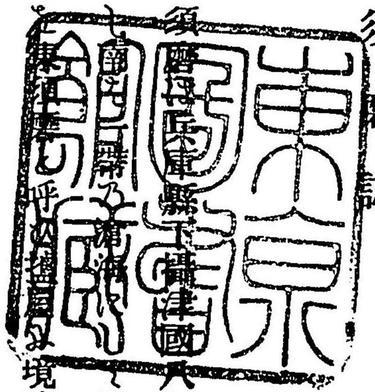
目録

須磨の沿革　須磨の意解
須磨の人家　風土氣候　須磨の風景　再興乃由來
海水浴の次第　療病院
須磨乃古詠　須磨の月　行平侘住蹟
月見松　葉箒　衣懸松
因幡遠山松　松風村雨古趾　因幡藥師
前田氏　菅の井　賴政藥師
重衡松　上野山福祥寺　青葉笛
若木櫻　嫩木櫻制札　上野
後の山　綱敷天滿宮　現光寺

風月庵似雲跡　芭蕉翁句碑　關屋跡
隱江　千守川　磯馴松
村上帝社　關守稻荷　八本松
一の谷　內裏蹟　鐵枴山
鵜越　鐘懸松扇松勢揃松　古跡塚
鉢伏山　敦盛石塔　敦盛蕎麥
泉水井　界川　須磨簾
藻艸磯馴味噌　潮雜水
須磨以東
聖靈權現　桂尾山勝福寺　神撫山禪昌寺
蓮の池　盛俊墓　長田神社

須磨誌

上原勇太　編纂



須磨は兵庫縣下攝津國八部郡にあり東は大手、野田村に接し西は播州塩屋に境し南は海に臨み北は鉢伏、鐵枴、青谷、の山々横はりその大手に接する處を東須磨と呼び塩屋に境する處を西須磨と云ひ東經百三十四度十分北緯三十四度四十分に位せり今延喜式に按ずるに八部郡は古へ矢田部郡と云ひ西須磨東須磨濱須磨は三村も原は今は西須磨一村にして東須磨はむろし辻堂村と呼びしとあり去れば古へより須磨といひしは西須磨のことなるべし紫式部が源氏物語須磨の卷の其乃始めに

かのそはは昔こそ人は住家などもなりなれ今はいと里はなれ心をごくて海士

の家だに稀になど云々

一千余年乃昔既みあ乃記事あれば須磨乃名は古きことも疑ひなかるべしかくも昔より人は住家あり月卿雲客は遊園地さりしみも拘はらず茅屋竹籬は一孤村とて今日猶ほ其乃觀改改めざる所以乃もはことしく編者は報道改竄ずして壽永乃戰建武乃乱うちつゞきたれば此樣おるべし

須磨の意解

さて此里を瑕瑾或は須磨など書きけるは何れは時より始まりけるか今より知るよ由なきも延喜式乃もとは瑕瑾を書けりとをれば瑕瑾は字は今より一千年以前已乃用ひしもはにて須磨乃字より古きこと明かなるべけれど何ゆへをまと呼びしや乃意は充分定かからず八雲御抄は源氏物語須磨は巻乃「こりひまはうらのみるめもゆかしきなれはやくあまやいかゞ花もはん」の古詠よりをまの意義を解して云へらく

こりすまとは不戀と書なりまの字心おし須磨の浦みいひかけずとも云々こりをまはうらなど云かけとあはこりず住と云心によみかなへりすまにかぎるべしこゞこりすまと斗はこりぬことなりはくみも讀むべし

一説によれは此地津乃國西南は隅に位ひる城以て隅を稱へし城用明は朝國郡村名二字以上の制城たてられしより隅城瑕瑾を改めしとまた里人は説には今の綱敷天神の側にある諏訪の社て東向き諏訪をてそ乃名高くこの社あるによりてをん昔はこの地城諏訪といひしかと星霜を重ぬるその中にいつしかをまと轉訛せりとかやとは暫を讀む人の判斷に任をん

須磨の風景

此地風景は佳絶なるは近頃日本三景乃一つなる天乃橋立舊景迄失ひしを以て須磨舞子これか相續乃地なりと世人かもてはやひの一話を以て全豹を窺ひ知るに充分なるへけれとも今その一斑を記さんに群巒背ろに擁し滄海前に横はりて東南紀泉の山は煙波乃裡に幽々に見へ西南淡路の岩屋に對し漁船乃煙迄燻らし往來絶へ間なく帆舟漁舫点々遠近に連り磯うつ波の白沙迄洗ふ景青松のこれに映帶せる狀氣車の白沙青松乃間に煤煙迄吹き時ならぬ雷鳴を作しつゝ東西に上下せる樣ことに春は上野の花夏は海濵乃松風冬は鉢伏鐵拐乃峰の雪壯年男子には鉢伏の登攀老幼婦女には舞子明石乃濵つたひ或は須磨浦の釣遊ひ東に禪昌寺の紅葉狩あり西に土山乃蕈狩あり所謂春有万樹花夏有百尺之泉秋有千里之月冬有數重之雪とは此地をいふへきか須磨乃栞記者と

若木櫻花　上野夏草　關屋間月　武峯晴雪　須磨寺鐘
兵庫歸帆　一ノ谷古城　鹽屋暮煙　磯馴松風　後山皈樵

乃十勝を綴り出し或は上野櫻花　天神濵納涼　月見山明月　鉢伏山暮雪　なと記するもありまた須磨名所獨案内記者は

關屋跡秋月　内裏跡夜雨　鉄拐峰暮雪　淡路島夕照
上野落雁　鵜越晴嵐　須磨寺晩鐘　明石歸帆

の八景迄記ひをれと八景十勝のことも古來より定説なきに似たり

須磨の人家

西須磨の人家は後ろり上野の小阜拔賀ひその麓ゑ帶の如く建て並ひ東須磨ゑ概たて平坦なり人家はその中央を貫きて殆んと西須磨の人家に連續せり概せは西須磨ゑ漁村にたて東須磨は農民なりといふも不可なきに似たり傳へいふ往古は上野ゑ臺に僅かに十七軒の住家あるのみにして其の當時の街道はいま上道と唱ふる月見山の麓字古屋敷より鉄枵山乃北方拔登りて播州地へ越せしとされは今の西須磨の人家ある邊は昔は海潮ゑ字ち寄せし處ならんゑ今村役場に乞ひ調査し得ゐる統計表拔左よかゝけて讀者の便覽に供ふ

明治廿四

東須磨村		西須磨村	
田	八十三町五反九畝歩	田	三十九町六反五畝十九歩
畑	十一町二反九畝歩	畑	四十一町四反三畝四歩
山林	四十八町二反六畝歩	山林	三十九町一反四畝二十一歩
宅地	七町六反六畝歩	宅地	十町一反一畝九歩

年度調査			
戸數	二百九十九戸	戸數	三百二十八戸
内	農 二百四十戸 漁 五十九戸	内	農 一百九十七戸 漁 一百三十一戸
人口	一千四百〇五人	人口	一千五百十八人
備考	明治廿六年四月ノ調査ニ依レハ西家磨村人口一千九百四十七人ニシテ内男八百三十一人女八百十四人寄留三百二人		

里人は極めて質樸にして實直なり清廉にして親切なり編者は此里の如き神仙境を他の避暑保養地に見受けをるなを村中いと古き家十戸あり

林　志賀　村井　丹治　藤田　原田　前田　岡田
友好　頼廣

岡田氏は仁和年間須磨寺開山の聞鐘上人拔出せし家にして古證文も今に保存せり前田氏の事は後章に明かなり十氏とも皆一千年以上乃舊家にしあれは諸氏を

訪ひ舊話を聞きあらんにをいと面白かるへし

風土氣候

この里は天然に風光と幾多の歴史を有するその上に土地高燥にして飲用水は海濵と山の手を問はず清泉湧き出て夏も南風海面より吹き送り冬は後に山岳重巒ありるを以て凜烈の北風を禦き四時の氣候異ることなくそのうへに海原より吹き寄せる空氣中には變形酸素多量にして人々の心神を壯快になし鉢伏鐵拐乃松林ふは的列並底の芳香を吐き肺患者も自然にその病を治せへく避暑療養乃地又は隱士閑居に所として實に適當の地なりをれたるや近來遠近の人々はとひあつまり療養遊園乃勝區となれり

須磨に

氣温表

華氏寒暖計

一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月
四十三度	四十七度	五十四度	五十七度	六十五度	七十〇度	七十七度	七十九度

療病院調査

最高	最低
八十八度	三十一度

再興の由來

西須磨乃近年療養遊園地としてこれ繁榮を致せるその由來を尋ぬるに明治十八九年に頃ひまではあゞ尋常に街道を過ぎゞして土人は漁農を乃み營を居りたゞが漁業としても淡路姫路などに如く大漁もなく隨りて利ひる所薄くそのうへふ不景氣うちはゞき追々地所を賣却ひるもの多く最上乃田地ひら一反に價ひ百圓より四五拾圓に下落し畑に如きも四拾圓を最高とたて拾圓内外まで下落せを終に甲の地を乙に手ふ歸し全く賣買に一段落を終へたり然るふ廿年の早春某中將一に

谷近傍の地を購はんとし約整はずして止む蓋し他方人乃須磨地を求めんをせしはこれを以て濫觴と爲ひついて某氏字八本松乃地を七拾五圓乃至八拾圓にて購ひ某氏は内裡跡近傍坪百五拾圓より百六拾圓に購ひその價ひ月々騰貴するも拘はらず他方人は購ふもはいよ〳〵多く某外人は某地を百八拾圓より二百圓に買ひあげしが山陽鉄道の布設と共に益々騰貴し來りて海濵は一坪五六圓は賣買を見るに至れり斯はの如く一瀉千里は勢戎以て遂に今日の盛況を呈するに至れり

東須磨は海濵に二三は洋館坪見受るはみにして別に地處は騰貴坪聞こざるに引かへ西須磨はこは盛況を呈せる所以はもは偏に地は風光に富めるがゆへならんこゝを以て幾多は他方人士が爭ふて巨金を抛ち山は手に海邊に別莊坪構ゆると同時に男女老弱を問はど年々來り寓ひるもの多く昨年は如きは七八月は頃まで出入は他客坪通算弥ば實に萬坪以て數ふべき然るに未だ之に應ぜる旅館は唯

海月館　保養院　松は家　海山樓

あるはみ海月館を當地旅館は鼻祖にして一は谷乃麓にありて海に枕し松は家と軒を並べり保養院とも也里人は設けもにして二は谷三の谷の境青松は間にあり幾多の樓閣積翠は間に碁布し實に須磨第一の大旅店なり海山樓は境川の邊りにあり眺望まゝ自ら趣を異にせり皆孰れも海潮は浴室なり其の他下宿營業を爲すもの亦數軒あり

林　良兵衛　志賀新左衛門　藤田吉次郎　森本政次郎
鶴谷松左衛門　原田虎吉　岡田喜平　志賀傳左衛門
岡田小三郎　友好捨次郎　友好吉左衛門

そ乃他農家漁家なとの座敷も暑中ゑ至らは悉く充滿せり

海水浴の次第

海水浴ゑ避暑乃人々か主眼とゑす所ゑして朝な夕なゑ三々伍々海邊に出て色くろぐ乃裸の童等うち交り引網せる樣ゑと眺めつゝ海水浴を試ゑつ笑もあり話ひもあり遥ゑ冲合ゑ游泳するもあり小石を拾ふもあり潮かけつかられつ戯むるもあと風流を好む人々は海山ゑ風景を賞玩し詩歌吟し歌を咏ひる等樣々なりを海水浴のその由來を聞くゑこゑ里に住む人々はこゑを事新しくとせされとも海水浴適當の地とゑて世乃人ゑ知らるゝゑ至りゑは明治十四五年の頃兵庫縣廳より今の保養院ゑ前の海濱ゑ井を堀り家を建て公衆ゑ海水浴場にあてしを以て始めすこゑ浴場は數旬を出てひ風波ゑ爲めに破れゑゑとこ乃時より脚氣患者の來る者いと多く近年に及んで遂ゑこ乃繁榮を致せり今は須磨驛の傍ゑ海水浴處新築中なり

療病院

療病院は三乃谷の上松林の中ゑあり明治二十二年八月院長鶴崎千代吉氏か姫路人士と相謀りて設けしもの乃なり故ゑ姫路病院の名あり五棟の病室は一段は一段より高く五十餘名の患者ゑ入るへし病痾を抱ひてこの里に來るもの乃を一手ゑ引受け昨年乃如きは七八月乃頃病室乃狹隘を告け六七十名乃入院患者を拒絶せりと聞く世乃温泉避暑地に赴くもゑ只其の風土或は温泉ゑ一任し還つて大患を惹き起せゑ談ゑ毎々聞き及ふゑとにしてこの里ゑ遊はるゝ人々にはこの上もなきことなゑ最も奇功を奏ひる病ゑ

脚氣　肺患　慢性胃病　僂麻質斯　子宮内膜炎

貧血病　腺病　實質炎慢性腹加答兒

と聞く其の他呼吸器に關ひる諸病ゐよしと云ふ終りゐ臨んて須磨地數年以前ゑ景況と近況を知らしめんか爲めり左に統計表対對照して記し置きぬ

西須磨村

明治十七年調査		明治廿五年調査	
宅地	七町七反五畝歩	宅地	十町一反一畝九歩
他方人所有地	五反八畝歩	他方人所有地	十四町五反五畝八歩
戸數	二百〇八戸	戸數	三百三十八戸
人口	九百五十八人	人口	千六百十五人
内他方人	三十六人	内他方人	三百〇二人

編者ゑ關東ゐありては鎌倉關西にありては須磨と古跡名所はもとより遊園療養地として世人ゑ口頭ゑ両地り語を聞く近きゐありと信して疑はをるなり是より名所古跡り記事ゐ移らむ

須磨の古詠

須磨り里須磨の浦須磨の海おどれ古詠いと多し今こゝゐ様々の歌集より散見ひるかまゐ〳〵うつし出しぬ須磨り卷ゐ云へる如く古へは濱邊り塩田の設けありしことも左の和歌を見て知らるべし

ひまれあまの塩やく煙風をいたみ思はぬかたよりなびきけり　讀人しらず

すまの海士り塩焼衣おさをあらみまとをにあれや君かきませぬ　同

白波はたてとこ波もゐかさならす明石もすまもをれかうる〳〵　人丸

すまれ浦に焼ゑほ竈りけむりこそ春ゐしられぬかすゑなりけれ　俊頼

さみたれはさくもの煙まちしめりしほたれまさる須磨のうら人　俊成

須磨のあまの袖を吹こし塩風のなるとそすれと手にもさまらす　定家

馴行はうきよなれはや須磨の海士の塩焼ころもまとをなるらん　女御徽子

いまのうらのあきさる朝はめもはるみ霞みまかふ海士のつり舟　藤原孝

すゆの海つりせし人もけふよりや千とせの松のしさにわさらん　惠慶法師

いまのあまの浦漕舟のかちを絶よるへなき身をかなしかりける　小野小町

風をいさみくゆる煙のさちいてゝなかこりいまのうらを戀しき　貫之朝臣

もしほくむ袖の月影をたづからよそみあかをぬ須磨のうらむと　定家

もしほやく煙みなるゝ須磨の蜑は秋さつ霧もわかいやあるらん　讀人しらず

須磨の蜑のうらこく舟の跡もなく見ぬ人こふるわれやあにある　西宮左大臣

さちのほるもしほの煙さへせねはそらみもしるき須磨のうら哉　藤原經衡

すまの浦み蜑のこりをむも塩木のからくもしさみもへ渡るかな　藤原清正

淡路かさ迫門の汐干の夕くれにすまよりかよふ千とりなくなり　西行法師

和田の原須磨の浪路を見わたせば雲らつさひして月もやとゝる　經尹朝臣

ゆくふねのあとの白波きへつきてうひ雲のこる須磨のあけほの　良經公

須磨のうらなみ路の末はきりそれてゆふ日にのこるあわぢ島山　藤原宗泰

もしほやく煙なさてそ須磨の海士ぬるゝ袖にもつきは見るらん　津守國冬

あふことはなきさよ歸る白波のなほより見るやこりすまのうら　頼政

ちからなう入かゝる日やひまの秋　涼菟

月を見ても物さらはすや須磨の夏　芭蕉

ほろ〳〵と雨そふひまの蚊遣かな　瓢水

ほとゝきひ消ゆくかたや島ひとつ　芭蕉

見渡せば眺むれ〻見れを須磨の秋　同

須磨の月

昔より月の名所にて今も中秋の月を賞せんとて近くは兵庫神戸遠くは大坂西京よりわざ〳〵來り遊ぶもの數しれず或は上野の臺に登りて眺めなば盆大の月は波間ゆ湧き出で漫々たるいと廣ク青海原も見る〳〵一帶の金波と化し淡路島邊に浮べる小舟まで殘る隈なくあり〳〵と見ゆる其乃景の幽秀ゆして清麗なる壯快ゆして遠大なる石山田毎の遠く及ばざる所なりをればにや紫式部も石山寺に中秋の月ゆ弄し源氏物語を著ス時須磨明石の卷より筆執ヲ始めしとなんかくも此景の式部が心ゆ醉はしめるもげゆ無理ならぬことぞかし只詩歌の稀なるはこの風景の爲めゆ遺憾とする所なれ

月ゆみてなきさる海のれもてかな雲のなみさへ〳〵ちもかゝらで　西行法師

見るうちゆ月しづみけり須磨乃雨　闌更

行盡攝山望播山、貪程夕過亂松間、一聲漁笛不知處、月白須磨灣復灣、　藤井竹外

在原行平卿侘住蹟

西須磨の東端菖蒲小路にあり傳へいふ仁和二年十二月光孝天皇嵯峨の芹川野に行幸ありしときこの卿供奉せしが齢已ゆ六十九歳に老ひけるゆ袂に鶴乃紋ある狩衣ゆ着けるは老の身ゆ適はぬとて

翁さび人なとかめそかりころもけふばかりとぞ鶴もなくなる

と讀ゑしが帝時ゆ五十七歳ゆ渉らせられ詞不祥なりとて須磨の浦に謫せられ須磨の配所に三歳住はれ終ゆ赦されて再び都ゆ歸りしとなんかし同卿の謫せら

もとに記事はいづれの書にも見へぬ古今集には「わくらはに問ふ人あらはいまの浦にもしほたれつゝわふとこたへよ」の前かきに

田村の御時に事ありてつのくにのいまといふ所にこもり侍けるに宮ぢ宮ちに侍ける人につかはしける

とのみありて謫せられしことは見へぬまた伊勢物語抜見るに

昔仁和ぢ帝芹川に行幸し給ひける時なま翁の今はさる事似けなく思ひけれともとつきに事ゑれは大鷹飼にて侍とせ給ひける摺狩衣の袂に鶴のかゝ抜つくり書きつけゝる「翁をも云々」帝の御氣色あしかりけりおのか齢抜思ひけれと若からぬ人は聞きねひけりとかや

とのみにて流罪のことなしたゞ西行撰集抄に

行平身にあやまつ事ありて須磨の浦へ流されもしほたれつゝ浦つたひしありきたるみあるあまにいつくにやいむとたつね給へと「白波のよせる渚に世ぢそこひあまの身なれはやとも宿めに」とよみてまきれぬ云々

とあるのみされと源氏物語須磨の巻の

ねはいへき所に行平の中納言のもしほたれつゝわひける家居近き邊なりけり海面はやゝ入りて哀ふ心ひこけなる山中なり垣ぢをまより始めて珍らかふ見給ふ萱家とも葦ふける廊めく屋なとをかしうちつらひなしさり云々

の記事みよれは西行撰集抄の詠歌及ひまへかきはこの須磨の巻より附會し來り里人乃傳説てこの撰集抄より出て來りしおもむきれた流罪のことは無根なるへしまゝ三年こゝ乃地に住ひしとの事も正史み見へに要にるゑ行平自ら譴を引きて須磨ゑ閑居せしこと真み近からむ

行平月見松

東須磨乃北に尾崎みあり古き松數株あり行平卿賞月亭に舊跡とかやよつてこの山を月見といふ昔津田大炊頭この山み城を築きしと聞く

葉　箒

須磨村役場にあたりに地名あり其に故を聞くに昔長州藩主参勤乃途次此處み休まれけるか葉ありの箒を以て塵を掃ふものあり同侯其の箒に名を問ふそに者葉箒と答へゝより後人そに智を稱し遂に地名となりしといふむかしはこに處にて葉箒脚胖なるものを鬻ぎて名産となせしもに よしなれども今とゝなし

葉箒で案内とりて西東にまからばまへちをも殘をに　蜀山人

衣懸松

西須磨より駒が林に通ぜる東須磨に道の傍みあり數年前までは古松ありしも今はかゝし或はいふ松風の謡曲み基き名付しと

わくらはゝ問人あらは須磨に浦みもしほたれつゝわふと答へと　行平

まゝ松林に北にあたり田中に塔あり傳へて從二位平光盛乃墓といふ

因幡遠山松

両須磨乃境ひの一段高き小阜をいふ或は松風村雨に舊跡とも傳へり里人は行平卿乃「立わかれ云々」の歌より因幡山と名づけしものといひさゞ浪里人にみならず攝津名所圖解にも其ことよしを載せて見ゆされどこの歌は同卿が因幡に守となり京を去る時に讀み殘しさるものにしていなばを山はいなばをいふことばよいんだならばといふ心をいひかけまつとしは松は待といふ意をいひかけしなり編者は杉谷氏乃書を寄せしみ左に如き回答あり獨りこの歌にみならず凡て行平卿に事み關と讀者が參考となることと多けゞばそのまゝこゝに掲ぐることゝおもしぬ

（上略）

立わかれ云々の歌みつき御質問相成右は攝津國須磨ふある因幡山なる由某書とやらんに御座候との事なれとも貴説乃如く今日迄先哲に説なき決して左樣なる事は無御座候彼の歌は文德天皇齋衡二年正月從四位在原行平朝臣爲因幡國守云々と文德實錄に相見候そ乃節京に殘されし人によみて遣はされし事み相違無御座候總て古今集に單み題しらずとして載せさる歌は大方京より他へ發足ひる時に乃にて他國みありて讀みたるは其故よしを記しあるが通例に樣に御座候又因幡國法美郡み因幡といふ地名あるは和名抄にも相見候へは或は其に山をさしさるにてもあらんか乍憚單に因幡國をさしてよめる歌あまた有之候へ共矢張大らかみ見さる方よろしからんと存候躬恒集にも因幡守に下るに「一日さみ見ては戀しき君かいなば年の四とせをいかて過をん」とも有り又後撰集にも家み侍りし女子いかなる事りか侍りけん心うしとてとゝめにきてまのりなれは女「打ちをてゝ君しいなはに露に身はきえぬはかりそありをとのむな」とも有之候 此等皆廣く因幡國をさしてよめるものに御座候されは行平乃歌も廣く因幡國をさしていへるに相違あるまじく候彼須磨浦古跡

誌とやらんに記し有之候て「わくらゝに云々」と歌より出てたる俗説と松風村雨乃古事に附會ふある謬説み相違有之ましと存候行平は須磨浦に流をれたる事も何も無之唯古今集み出てたる「わくらはゝ」の歌は何か執務上に過てもありて自謹身の爲暫く蟄居ふたるものみ御坐候へは須磨浦みて「立わかれ云々」と歌抔をよむへき筈も無御坐候松風村雨の俗説も西行の撰集抄み「ふら波の云々」とよめる歌よりも附會しるるものにて取るに足らさる謬説み御坐候右は須磨誌御編纂中との事に御坐候へは委細愚説ゆ吐露致し申候御参考まも相成候はゝ幸甚に御坐候　（下略）

井口隆太郎改　杉谷正隆

松風村雨舊趾

西須磨の街道より半町はかり北みあり近年まて辻堂あり土人呼んて村雨堂とゝひしと傳へいふ行平謫居の時村長畑殿の娘にもしほ小ふしの二女あり須磨浦て潮を汲ふありけるか此所にて同卿に出遇ひ宿はと尋ねられ彼女等は退辭なく「ふら波の云々」と歌讀みしらは同卿喜ひ斜めならをれとしも村雨のふりきて松風吹きわありけれは時にふれるる名なれやとて松風村雨と名りけ遂に二女とも み召をれけりとなん同卿歸洛と後田井畑村にかへり終へしをて墓は田井畑字畑殿にありこの傳説に付ては巳り前に載せたる杉谷氏の書簡に詳かなれは別に附記せひして西行撰集抄より出てたる俗説なる拔知らん

因幡藥師

圓福寺は東須磨みあり寺記云行平此浦にれはせし時と念持藥師なりと長一尺三寸乃佛像なり攝津名所圖解記者はいへり因幡藥師は京にもあり在原行平と橘行平との混雑も覺束なしと

前田氏

順路乃ゐめ前に述へ置きさる前田氏は事蹟記をんに同家は往古井戸莊中莊下莊を領し世々此地は里長ゐして家は須磨寺の前より二町余東乃當り街道は北側ゐあり家譜由書にいふ神功皇后は時代より繼續せりと又いふ須磨記乃中に菅公須磨にて橘季祐の家ゐ立寄らせ給ふことを記せるは則ち前田氏ゐ祖先はことなりと家に藏せる重寶は

菅公自壽影（同公此里に泊せる時の筆なりといふ）　弘法大師石像（自作）　後陽成院御宸翰

秀吉公筆　一休和尚筆　菅家須磨記（從二位實積卿の筆）

三尊彌陀（惠心筆）　古證文（增田右衛門　津田ノ惠閑）　三夕和歌（六條宰相有藤卿冷泉二位爲久卿藤谷三位爲信卿）

西行法師筆　制札（瀧川左近松　平武藏守）　六字名号（元祖一遍上人の筆）

今は散逸して保存せるもは少しとを惜むへし同氏は庭内ゐ菅公手植松あり今も緑りをかへに杜若も猶保ありこを世にその名高く昔東海道乃雲助は左の句は歌ひしと

須磨乃前田はかきつは中乃あやめさくとをもらなんた

さいてちほれてまたをく花は須磨は前田はかきつはゐ

また邸後乃事代主は神祠ありとは神功皇后三韓より凱戰して還御の途次こゐ乃立寄らせられ出雲國より事代主命を迎へしもゐよし今長田社と唱へまゐ元宮を稱ひ昔は祭典乃菓人形三千三百三十三個を散々に伐り三韓討伐の狀はかせりをそ

拔司り賜ふ神と聞いて

土佐針ヲかくるや土佐の初かつほ　滝海

つりをほろいとゐをはるや夏の月　加賀千代

つり人にならひて阿鹿きく夜かな　闌更

菅之井

前田氏の邸内にあり古へ菅公乃此浦に泊せる時こゝ乃泉井を酌み送りしかは菅公喜ひ給ひて自畫ゑ肖影拔贈られしと近年まてゐゑ水にて酒を醸し菅ゑ井ゑ銘せり或はいふ眞ゑ菅乃井は定ゝるらゐと

ひまに泊りし時前田氏より菅ゑ井といふ名酒を贈らるる

菅乃井拔くむとゐつきし大自在名はへゝろもし神ゑめくみふ　湖夕

賴政藥師

須磨寺乃人家より東半町程ゝふて道ゑ北にあり淨福寺と号す長一尺乃藥師を安置す聖德太子ゑ作と云ふ須磨記ゐ

上野ゑ岡といふ所何かゝ乃寺あるよしまて鐘さいかへりて耳頭うれひを催せり云々

こは此寺ゑことゐして古へは立派ゐる寺なりゝゐ其ゑ後破壞せし拔久壽ゑ頃源三位賴政再興ゐ故に賴政藥師ゑ名ありとなん例年正月八日には夜鬼踊とて數人假面を冠りて鬼に扮し竹束に火を點したるもゝを持ち村民拔追ひ狂ひしよしな

れど今は廢せり

重衡松

須磨寺前に街道の北にあり重衡は平清盛が五男宗盛知盛等の弟なり壽永乃戰ひに生田に副將軍なりしが軍敗れ西坂指して落ちけるが此松乃下にて高家景季等乃爲に虜となりしを時に里人須磨に名物濁り酒を捧げしかば

さゝほろや波こゝもとを打ち過てはまてのむこそあはこり酒なれ　重衡

とかし平家物語を按ずるに

主從二騎助船に乘らんとて渚に方へ落給ふ所に庄四郎高家梶原源太景季好敵と目をかけ鎧武あわせて追懸奉る渚に助船共多かりけれとも後より敵は追懸たり乘へき隙もなかりけれは港川楯藻川を打渡り蓮乃池を馬手に見て駒か林坂弓手になし板宿須磨をも打過て西坂指てそ落給ふ云々

板宿須磨をも打過きることなれば虜となりし場所はこゝにはあらぬを思そる

上野山福祥寺

東須磨の街道より北へ二町余西須磨に上野にあり眞言古義にして高野山蓮華三昧院の末寺なり舊時に御朱印地にして仁和年間聞鐘上人乃開山に係り本尊は長三尺五寸の觀音なり世に須磨寺といふて此巨刹坂いふなり寺記を讀むに

むかし光孝天皇の御宇海中夜毎に光有て雲端坂照に漁夫網を下しければ栴檀

木の觀音を得たり云々因茲朝廷に達し仁和二年聞鐘上人に勅して寶殿を營す
云々厥后久壽に頃源三位頼政よりに歸依し殿堂支堤鎮守等を重修す云々

今岡田氏の古書を借覽するに天長年間に海中より觀音を得北峰山に安置せしを
仁和二年敕により聞鐘上人この地に移し開基せりと見ゆ須磨名所獨案内には、
又と兵庫惠倡山に在りと見ゆ惠倡山とは北峯山にてなるか定かならず又同獨案
内にいふ頼政再興後慶長七年震災に罹り豐臣秀頼公之を興し十六石に御朱印地
となせりと今は頗る廢頽し十二坊も僅かに蓮生正覺の二院存するのみ二王門に
力士は運慶湛慶の作といふ中門は明治廿四年本堂の階下に移し猶ほ馬盥の額と
掲く木は躑躅にして義經の用ひしものよし或は敦盛に用ひしものといふ寶物
なり

保呂衣名号　熊谷直實の筆其の側に和歌あり　敦盛畫影　直實の筆

法に水すゑと硯て書をくも心行具足阿彌佛力

敦盛の鎧　高麗笛　學祐僧正の作

敦盛赤旗名号　法然上人の筆

爲敦盛空顔隣清菩提書之源空　側らに和歌あり

音壽丸世にこそすまてゝへいりし彌陀の蓮にとゝに生るゝ

敦盛の和歌

題庭乃雪

よしやさゝとはれても又なくさまんなれ跡なき庭乃白雪

寄松祝言

見とりなる松に千とせの色みせて久しかれとやのきの山風

青葉笛

僧空海入唐の時彼の地にて自ら製せしものなりしが偶然にも二枝生し依つて時乃天皇に獻せしかば青葉乃名ばかり給後鳥羽天皇より平氏に下し給ひしもはと云ふ平家物語に「件の笛は祖父忠盛笛の上手にて鳥羽の院より下し給られさうしを經盛相傳せられさりしが敦盛笛の器量たるに依りて持されさりけるとかや名をは小枝とぞ申しける」とあるはこれ笛ばいふなれ

備中藩常山東行筆記曰

今須磨寺に敦盛の笛とて傳へされとも笛も又經盛の方へ送り返しける事盛衰記に見へされはあらぬ贋物にぞ有へき

寺説曰

當山の寶物は貞享年間江州寶藏寺より貽納せり

常山の真贋置かんか寺記に依らんか編者は何れ故それと定め得ぬを記して讀者の判斷に讓らん以上の什物は何人にても常に縱覽し得へしこれ外種々の寶物あるよしなれと開帳乃時ならでは見ることかなはぬ敦盛堂は北堂の東にあり直買の作りし敦盛乃木像を祭る其れ前に老松あり幹一つにして雌雄に二枝に岐る相生に奇木なり枝葉に模樣尾上相生の松に優れり義經腰掛松辨慶乃鐘は本堂の西にあり其の西に神功皇后釣竿竹とて漢竹となん呼べる小篁あり生田神社にも神功皇后釣竿竹ありといふ何れが真なるや詳かならぬ

若木櫻

本堂より石階に降りて右側にあり已に世に定論ある源氏物語須磨の卷に

ひまには年かへりて日なかくつれ〳〵なるにうへしわか木に櫻ほのかにさき

そめし空れけたきうらゝかなるよろづれことそれほしいでうれてうちなき給ふおり〳〵多かり二月廿日あまりいよし年京をわかれし時心くるたかりし人とれ御ありさまをとこひたく南殿れさくらはをかりになりぬらん云々

れ言葉みもとゞ植へ置きしなるべたゝ

さくら花たが世れ若木ふりにてゝひまの關屋れあとうつむらん　定　家

右乃什物中にあり

嫩木櫻制札　辨慶れ筆

須磨寺櫻

此華江南所無也一枝於折盗之輩者任天永紅葉之例伐一枝者可剪一指

壽永三年二月　日

攝津名所圖解ゝは左れ如き論難を加へらる

此花江南とは梅れ制札也詩話曰在江南寄梅花一枝詣長安、又云江南何所在聊贈一枝春、又云北人江北望不見隴頭梅、

然る時は此制札は箙梅杯みありゝし若木櫻の制札をいふは辨慶れ大ひなる麁なるべし、又所無も所務なり辨慶は三塔みての博識ゝる人には似合ざるべし

然れども昨冬史學會場ふ於て重野安繹君が「辨慶」を題し演説中「かれ腰越狀乃如き嫩木乃制札乃如きは其れ擬物ゝる巳み古人の定説あり云々」れ句あり依つて其れ質問を試みしが史學雜誌第四十一號れ紙上ゝ於て同博士れ答辨あり第一

ゟ新編鎌倉志六鎌倉攬勝考十新編相模風土記稿百五平泉雜記二等より例證を揭げ今腰越村滿福寺ゟ存せる腰越狀は辨慶が筆ゟあらざることを明かにゟ次ゟ右に載せたる攝津名所圖解乃論難を揭げ終りに

平泉雜記四

辨慶筆跡

攝州須磨寺ノ寶物ノ中ニ、辨慶カ筆跡トテ古キ制札アリ、其文章ニ曰

此華江南云々下略

壽永三年二月二日

一書ニ辨慶ハ廣才ニシテ智慮深シ、行狀ミナ人知レリ清貧ニシテ今ニ殘レル文書多クハ鎧馬具等迄借用ルノ狀也、

鎌倉實記ノ作者評ニ辨慶一日辨慶ゟ武勇天下後世ニ至テ童子婦人マテ辨慶ト稱ス此亦其實ナキヿ有ヘカラス然共義經起兵ノ初ヨリ今日ニ至テ辨慶カ勇力武功ノ事實ヲ記シタル實錄ヲ見ス博識ノ人ヲ俟テ可レ散レ疑也

とありをれば同博士ゟ「今ニ殘レル文書多クハ鎧馬具等迄借用ルノ狀也」と乃句ゟ基き嫩木ゟ制札ゟ擬物なること古人ゟ定說ありといひたなれこゝに於て攝津名所圖解ゟ論難も還つて博識の辨慶ゟ筆跡にあらざること裏證にるもゟとあるべし

上野

なみかけぬにまゟうへゟゝ露ゟゝに猶しほたるゝとびところも哉　淨海法師

鈴ふねゟよにる音ゟやをはくらん須磨乃上野にきゝにかくなり　顯昭阿闍梨

須磨寺に東西の田野をいふこと地建武に兵乱み足利直義に陣處となれり太平記

兵庫海陸寄手に一章ふ

去程に明くれば五月廿五日辰の刻に澳の霞に晴間より幽に見ゆる船ありいさりに歸る海人か淡路に迫戸を渡る船かと海邊の眺望を詠めて鹽路遥に見渡せて取梶面梶み搔楯搔きて艦舳に旗を立てゐる數万の兵船順風み帆をそ擧けさりける煙波渺々たる海の面十四五里か程に漕き連ねて舷を輾り艦舳を雙べされば海上俄に陸地み成りて帆影み見ゆる山もなしあなたこたゝし吳魏天下を爭ひし赤壁の戰大元宋朝を滅せし黄河の兵も是には過ぎじと目覚して見る處に又須磨の上野と鹿松岡鵜越に方より二引両四目結直違左巴倚せかゝりの輪違五六百流差〳〵連ねて雲霞に如くみ寄せかけたり海上の兵船陸地の大勢思ふしよりも霞くして聞きしにも猶過ぎされは官軍御方を顧みて退屈してそ覺えける（下略）

五月廿五日に建武三年りして海兵は尊氏陸兵は直義なり又同書正成兄弟討死の一章ふ

左馬頭に兵ども菊水に旗を見てよき敵なりと思ひけれは取籠めて是を討たんとしけれとも正成正季東より西へ破りて通り北より南へ追ひ靡けよに敵と見る様ば馳せ雙べて組みて落ちてえ首をとり合はぬ敵と思ふをば一太刀打ちてかけちらに正成と正季と七度合ひて七度分る其心偏に左馬頭に近つき組んで討さんと思ふにあり遂に左馬頭の五十万騎補が七百餘騎に懸靡けられ又須磨の上野に方へ引退とけける云々

これ等は記事を讀みて直義の陣處なりしこと明けし當時里人は須磨寺は西乃谷
み小屋を搆へて退居せりとなん今うこの谷は小屋の谷と呼べり

後の山

上野とり北は方の山をいふ源氏物語須磨乃卷に

煙いと近くとき〳〵立くるをこれやあまは塩やくならんとたほしわるはた
はしまはうしろの山よしばといふもはふはふるなりけり云々

月いつるうしろの山はくもはれて須磨乃いほりみかへる雲ら風　家長
とふ人のおもひよりしと柴の菴のうしろの山ゐをちつきよけり　爲尹

綱敷天神

千守川より二町余東みあさり松林のある所なり傳へいふ延喜三年菅公筑紫へ左
遷は時風波あらく暫らくこゝに上陸せらる其乃時須磨は浦人網は繩は圓座をし
敷きければ安居し給ひそ乃像を模して神躰とおし祭りしとかやこゝに由つて綱
卷天神綱輪天神などの名あり傍は社は前に述べたる北向諏訪明神なり

家集よ

障子の繪に須磨の浦の歌書さるみ神社み寄て行浪は高けれそたよせそ御
てくら多くまつる所は歌よめる

さよ世とはたもはをらなんわた津海乃祈るこゝろは神そ忘るらん　慮愚法師
白なみのいろよみまがふみてくら歌たよせみうけよ神のこゝろかみ

現光寺

千守川乃東街道の側にあり永正年間の建立に係る寺内に西宮左大臣の舊跡ありとて世に現光寺拔源光寺と敎め書く人もあるよしなれどもこは源氏物語に光源氏は西宮左大臣を指しとするものなるより後の人現光、源光相似とるとめ終に同左大臣の謫居地といひ源光是なりとなにみ至りしならんか當寺も中古禍災に罹りしとめ其乃由來詳かならぬ什物に塗太鼓あり桶乃如く板片拔以てはき合せとるものなり按るに陣太鼓ならん

風月庵似雲跡

同寺境内本堂の右にあり近年まで一堂ありしよしなれど今は碑を建てゝ舊趾を表するにみ碑のうらに「いつこもをとされゝいひけむをまに浦やかゝるところの秋乃ゆふくれ」に和歌あり

つきにふけ須磨に上野乃あきの風尾花乃なみにつゝくうらなみ　似雲

似雲始め如雲と号し廣嶋に人なり歌を能し極めて天下を歷遊する故に世人呼んで今西行といふ似雲之を聞き「西行に姿はゝりは似されとも心は雪と墨染に袖」と延享四年須磨にあり鹽田乃再興を謀り鹽燒そむるや

絶てみぬもしほにけむりとちかへりむかしにかすむとほ寵にうら
とほとされし昔乃ひとのこゝろまて今日くみてしる須磨にうらなみ

再興乃鹽田又絶へぬれは

身をそたむまさこりすまみやく塩はけむりもさへしあとのうら風

後こは地を去りしか墓は河内國弘川にあり

芭蕉翁句碑

同寺は門前にあり裏よ「見渡せはなうむれは見れは須磨乃秋」乃句をたるせり往々芭蕉は墓なとゝ聞誤る人もあるよしなれとあは豊後は俳士芳蘿坊の建てゝるもはなれは併せて記し置きぬ

須磨關屋跡

現光寺の西街道の左右ゑ一堆の臺ありこれをいふと延喜式ゑ見ゆこは四關の一にしてその名世ゑ高し今石を建て行人の便に供せり

あそちしまかよふ千鳥はなく聲乃いく夜ねをめぬ須磨乃せきゑり　源兼昌

淡路ちまはるか乃見つるうき雲もはまのせきやにしくれきにけり　家隆

はゆまちやすまの關屋の板ひをしつきもれとてやまはらなるらん　師俊

雪のもる須磨乃せき屋の板ひさしあけゆくつきもひかりとめけり　定家

旅寐はる夢路はゑへぬ須磨のせきかようちとりのあけほのゝこゑ　同

はまの關ゆめ波とをさぬ波乃音波おゑひもよらてやとをかりけり　慈圓

朝思ふ須磨のせき路はかしまくらゆめをはと波はな笑乃まゝかゑ　素昭

さひ人はたゝと涼しくなりゑけりせきふきこゆる須磨はうらかせ

こは「旅人は云々」の和歌を花島餘情には忠見か集ゑ侍るなりと續古今集及ひ勅撰には行平と載せらるこを須磨は巻ゑ

須磨にてれと〻心つくしの秋風を海を少し遠けれは行平乃中納言の關吹き越ゆるといひけん浦波よる〳〵は實にいと近く聞へて又なくあはれなるものはかゝる所に秋なりけり

とあれはこれにもとひき家定等かをり定めたるものならむか

須磨隱江

現光寺に西北の田圃をいふ今審かみ知るよしなし

こり須磨のこもり江に生るつきぬるはうき身にもれを思ふ頃かな

こもり江に隙なくうきるうきくさにきなくそ人はこひしのひける

千守川

關屋の西の小川をいふ渡せる石橋を關守橋と呼ひ末流乃福岡路守橋と稱ひこの川岐千鳥川路守川關守川と唱ゆ攝津志には邏溪と見ゆ攝津名所圖解には兼昌に「淡路島かよふ千鳥云々」に歌より千鳥川眞名りといへり壽永乃戰ひ乃一の谷城はこの川を外壕となし一乃谷岐内壕となせしよしまゝこに川の北に小高き岸を一に谷東門乃櫓跡のよし須磨名所獨案内に見ゆ路守橋に傍らに字新田に地は文祿年間ゑ埋めたる處乃して其乃東端は鹽濱乃蹟なり

磯馴松

須磨のうらやゝきさ乃たてるそなれ松とつ〻は浪の打ぬ日そなき　俊　頼

こに浦に濱松をいふなり行平卿よつき奇談あれと牽强に過きるれは省きておゝ

よ載せし

村上帝社

千鳥川は西街道の北側にあり傳へいふ藤原師長琵琶を好み唐に赴き其は奥妙玄極めんと弦上といふ名弦拔携へこゝよ來りしか梨壺皇女の靈現はれ師長を留め龍宮より獅子丸となん呼へる名弦を捧けしのそこれゐて村上天皇より妙手を授かりしを以て入唐やみたゝとなん攝津名所圖解には弦上といふ謠曲の趣を諺よいひ傳へり其は例證明かならすとゝ見ゆ

關守稲荷

村上帝社の西の路を北に登らは古松の中にあり昔しは須磨里は鎮護社にして關屋は此處ゐあるとしゝ故に關守稲荷の名ありと傳ふ定かならすこの傍に蛇窟ありと

往古人民の穴居せし處といへとまた定かならす

八本松

西須磨は西の端は字なり古松數株街道は傍らにありむかしはこは松は下に八文字屋となん呼へる店ありしよし院本の彦山權現に京極内匠か吉岡一味齋の娘は菊を下男友平の東須磨に駕籠やとひに行きしあとゐて殺害に及ひしとはこは所ありといふ院本ゐよれは慶長年間は始末ゐたて二百九十年以前は事なり定かならぬことなれと里人のいふかまゝゐこゝに記ゐ置きぬ

一ノ谷

西須磨は西一段高き所ありこれなん名にし負ふ源平両族は一大血戰場なり谷は深さ四丁余幅二十間両岸は高さ十二間余あり讀者は松根に踞し平家物語逆落は

一章を讀み給えんかそゝろに懷舊乃情浮ひ出ひるなるへし

逆落ひ事

是を始めて、三浦、鎌倉、秩父、足利黨には猪股、兒玉、野井よ、横山、にしたう、鈴木黨、惣して私ひ黨ひ兵共源平互ゝ乱れあひ喚ひ叫ふ聲は山狡ひゝかし馳せ違ふる馬乃音て雷ひ如く射違ふる矢は雨乃降るに異ならひ或は薄手負ひて戰ふものもあり或は引組ゑ指し違へて死ぬるもあり或は取りて抑へて首を掻くもあり掻るゝもあり何れひまありとも見ひをりけりかゝりしかとも源氏大手はかりにてはいかゝも叶ふへしとも見ひをりしゑ七日の日乃曙に大將軍九郎御曹子義經其勢三千余鵜越ゝ打ち上りて人馬ひ息休めてひはしけるか其勢にや驚きたりけん牡鹿二つ牝鹿一つ平家ひ城廓一の谷へそ落ちゝりける平家ひ方ひ兵共是ゝ見て縱令里近からん鹿谷も我等ゝ恐れて山深うこそ入るへきゑ只今の鹿ひ落樣こそ怪ゝ思れいかゝきまゑも是は上乃山より敵落ひにこそとて大ゑ驚く處に爰ゑ伊豫ひ國ひ住人高市乃武者所清章進み出てゑとひ何者にても あらは面れ敵ひ方より出て來りたらんとるもの没通すへきや字なしとて牡鹿二つ射とめて牝鹿没は射いてそ通しける越中ひ前司是を見て詮なき殿原の鹿乃射樣かな只今乃矢一筋にては敵十人をは防かんひるもひを罪つくりに矢たうゑゑとそ制しけるを程乃大將軍九郎御曹子義經平家の城廓遥ゝ見下してひはしけるか馬共落して見んとて少々落をれけり或は中ゑて轉ひて落ち或て足打ち折りて死ぬるもありされとも其中に鞍置馬三匹相違なく落ちりきて越中乃前司か館ひ前に身振してこそ立ちゐりけれ御曹子馬は主々か心得て落さんゝは痛うは損ひましかりけるそ只落せ義經を手本にせよとて先つ三十騎をかり眞先かけて落されけれは三千余騎の兵共皆續きて落ひそこしも小石ましりひ砂ゑりけれは流れひとしに二町許颯とひとして壇なる所ゑ扣へゝりそれより下を見渡せは大盤石乃苔むしゝるか釣瓶下ゑ十四五丈そ下りゝるそれよ

り先は進むへきとも見えに又後へ取りて返へへきやうもなかりしかは兵共爰
を最期と申してあきれて和へさる所み三浦乃佐原乃十郎義連進み出て申たけ
るを我等か方よりを鳥一つさちてさにも朝夕かやうに所ゑは馳せあるけ是は
三浦に方に馬場をとて真先駈けて落しけるを大勢皆續ひて落へ後陣に落へも
乃〻鎧の鼻は先陣に鎧甲にをはるほとおりあまりのいふせさみ目ゑ塞きて落
しけるあへ〳〵聲をたのひにして馬に力をつけて落へ大方に方にたわさとは見へ
す只鬼神の所爲とを見へし落しもはてぬ関を咄とを作りける三千余騎か聲
なれとも山彦答へて十万余騎とを聞へける村上判官代康國か手よを火を出し
て平家乃屋形假屋を片時に煙と燒きはらふ黒烟既乃押し懸りけれは平家に兵
共若しや助るとを前ゑる海へを多く走り入りける渚にを助船とも幾らもありけ
れとも舟一艘には鎧ひさる者共か四五百人千人許籠み乗りたらんみゑしかは
よかるへき渚より三町許漕き出て目乃前みて大舟三艘沈みにけり後はよき武
者をは乗るもと雑人原乗へにへからすとて太刀長刀みて打ち拂ひけりかくへる
事とは知りゑから敵に遇ひては死へにして乗せしとへる船みとりつきつかをつ
き或は臂うち斬られ或は肘うち落され一に谷に汀よ朱りゑりてをなみふした
るさる程に大手にも濱に手みも武藏相模乃若殿原面を振らへ命も惜ますこゝ
を最期と貫め戰ふ能登殿は度々に軍に一度も不覺たを給はぬ人に今度は如何思
はれけん薄墨といふ馬み打ち乗りて西を指してを落ち給ふ播磨乃高砂より御
舟よ召して讃岐に八島へ渡りたまひぬ

梁田邦美

殷氛一抹崇徽星、海岸忍留舟翰青、冠蓋春寒風度谷、劍瓊雪暗夜忖度、鄧軍蜀嶺九
天下、宋主崖山幾月經、赤幟光消空退熔、無人對酒泣新亭、

賴山陽

播之首、攝之尾、吾視其地何雄偉、山勢北來迫海壖、松柏露根乱蘆葦、怒潮湧沙出白骨、啼小鬼兮哭大鬼」聞說平氏曾此鏃赤旂、壓羆爲城澎湃爲溝、左控王畿右甸服、舊業自期唾手收、何料東人有機智、要害早已被耽視、九郎一身渾是膽、伏旗仆鼓出不意、蜀道雖難不用氊、懸崖絶壁如平地」組練劃山訝懸瀑、蹄間三尋眞是麗、秦宮殿宇從一炬、晉人爭丹指可掬、桓伊弄笛終貽禽、劉琨嘯歌亦遭戮、勝敗有機少人知、繪畫徒傳娛童兒、一自貂蟬出介冑、上下文恬又武熙、豈知養虎自遺忘、羽翼既成猶守雌、敢忘越人殺其父、白旄一出誰能支、宛如翡翠遇飢鷹、不怪毛血紛雕披、獨有武州能捐軀、婦人群中見丈夫、吁乎諸君皆能學之子不將寶劍附天矣、

小林至靜

廿餘年夢競浮榮、豈啻三公與九卿、歌詠何曾資治國、驕奢終是忘修兵、史中豪傑今邱墓、望裏煙巒舊帝城、驚地海天風雨起、怒濤髣髴鼓鼙聲、

高橋白山

海山形勝尚依然、下馬低徊暮春天、湘竹淚寒青葉笛、戎衣夢冷落花篇、王孫遺恨迷芳草、帝子寃魂哭杜鵑、一曲琵琶度平語、榮華說盡二十年、

稻本陽州

攝山落水々連天、不鎖關門七百年、青葉笛殘人那處、依稀明月照無邊、

日柳燕石

海甸腥風吹翠華、諸盛衰運附長嗟、三軍下嶺如飛雨、一族漂波皆落花、笛朽古城鶯續曲、宮荒寒浦鬼乘車、憑誰爲問水濵事、枯髑無言坐白沙、

片山冲堂

舟過須磨浦、左指鐵枵峯、危壁削千仞、猿狖斷行蹤、憶昔源廷尉、躍馬下層穹、勢如急霆擊、何人敢折衝、叱吒撼山壑、風怒海洶々、走者相蹂躪、進者殪於鋒、一箭盡飛鳥、安復事良弓、茫々六十州、眇軀無地容、倚舷長大息、此意有誰同、

内裏蹟

一の谷の右に上ふあを此地もやはり須磨の上野を呼へりこれなむ安徳帝行宮の跡ふして今も老松數株あるのみ然れども四方廿余間の處は土地高く自らその遺蹟を存せり平氏擧族こゝに滅ひ内裏も亦兵燹に罹り龍駕西海ふ幸して再ひかへり給はす爾來爰に七百年落葉に埋もれ枯草ふ鎖をれ唯こゝ荒涼に痕迹を留むるに爰近來村内の有志相謀りて一の谷廟社を創立し神靈を吊慰し奉らんとす爰聞く編者は又こゝに平家物語落足の一章を記ふ置きぬ當時に激戰の樣なと此地を互に見くらへさらんには大に發明に成る事あるへし

落足に事

小松殿の末子備中守師盛は主從七人小船に乘り落ち給ふ所ふ新中納言知盛に卿に侍に清衛門公長をいふもの鞭鐙を合せて馳せ來りあをはいかふ備中に守殿に御船こをそ見參らせ候へ參り候てんと申ふけれは船を渚へ差し寄せたり大の男の鎧着なから馬ゟり船へかはと飛ひ乘るふなしかはよかるへき船はちひさしくるりと踏を返してけり備中守浮きぬ沈みぬふ給ふ所に畠山か郎黨本田次郎近常主從十四五騎鞭鐙を合せて馳せ來り急き馬より飛ひて下り備中守を熊手に掛けて引き上け奉り遂に御首をそ掻きてける生年十四歳とそ聞に成備前に三位通盛は山に手に大將軍ゟてれはしけるか其勢皆落ち失せ討ゟれ大勢に押し隔てられて弟乃能登守ふは後を給ひぬ心靜に自害せんとて東に向ひて落ち行き給ふ所に近江國の住人佐々木乃木村の三郎業綱武藏に國の住人玉乃井乃四郎助景彼是七騎か中ふ取り籠め參らせて遂に討ち奉りてけり其時には侍一人附き奉りゟりけれとも是も最後の時は落ちあはに凡東西乃木戸口時移る程に もなかりしかは源平數に盡ふて討ゟれふけり櫓に前逆木乃下ふは人馬の肉山の如し一に谷小笹原緑乃色に引き替へて薄紅ふそなりにける一乃

谷生田に森山にそそ海に汀み射られ切られて死ぬるは知らに源氏乃方に切りかけらるゝ首とも二千余人なり今度一に谷にて討されさせ給ひさる宗徒の人人は先つ越前乃三位通盛弟藏人大夫業盛薩摩守忠度武藏守知章備中守師盛尾張守清貞淡路守清房經盛の嫡子皇后宮亮經正弟若狹守經俊其弟大夫敦盛以上十人とそ聞に し軍敗れみけれは主上を始め参らせて人々皆御船に召して出をせ給ふこそ悲しけれ汐に引かれ風ゑ隨ひて紀伊の地に赴く船もあり蘆屋に沖に漕き出て波み揺らるゝ船もあり或は須磨より明石の浦つたひ泊さゝめぬ楫枕片敷く袖もたほれつゝ朧ゑ霞む春に月心を挫かぬ人そなき或は淡路の迫門に押し渡り繪島か磯に漂へそ浪路遥になきわさり友まよはせる小夜千鳥是も我身にさくひかな行末いまさいつくとも思ひ定めぬかと思しくて一の谷の沖み休らふ船もありかやうみ浦々島々に漂へは互の生死も知りかゐし國を從へるとも十四箇國勢乃附くことも十万余騎都へ近つくことも僅み一日の道なれは今度はさりとも頼もしうこそ思はれつるゑ一乃谷をも攻め落されていとゝ心細うそなられける

鐵枴山

一の谷に上み聳へさる峯に いふ昔多力乃樵夫あり常に鐵に枴に携へこの山に入りたよりところ乃名ありといふ逆落しとて世に名高き處はこに峯より麓まて坂にふなり又巖石落しの名あり舊明石侯世襲に都度こに山嶺ゑ登りて烽火を擧け其に合圖に以て領内に各地に烽火に擧けしめ我領分を一覽せしよし須磨名所獨案内に見ゆ

鵯越

鐵枴山に北み當る峰續き乃山といふ源九郎三草山麓三千乃平軍に夜に乘して襲

ひ撃ち三千の兵を提けこの山を踰へ一の谷へ攻め入りしなり路極めて峻嶮なり

鐘懸松熊谷扇松勢揃松

鐘懸松は近年まで鐵拐山に半腹よありしも今は見へぬ壽永の戰ひゐ鐘かけ鳴らせしとに傳説より名けしならむ熊谷扇松は柴山に峯に見ゆ蓋し其に狀扇ゐ似さるゐよつて名付けしにもありなん勢揃の松と其に麓に見ゆ源九郎兵をこゝに揃へて一に谷城攻めさるによりてこに名ありとなん

古跡塚

二に谷に西三の谷に東にあり但馬守經政城の四郎ょ伐されさる所ゐりといふ戰に濱は是より東一に谷に石橋邊の濱をいふゐり

鉢伏山

三に谷に上に峯城いふ神功皇后三韓より御歸りに時こに山ょ地の鎧を埋め給ひしよりこの名ありとゐん山に形狀まさ鉢伏せたるに似さり當地第一に高山にして絶頂より眺めなば播州に浦々一望の中にあり熊谷平山一二の懸とて平家物語に載せられたる所はこの山に麓三の谷より西の濱をいふなり

敦盛石塔

三の谷より西へ一町街道に右側ゐあり高一丈余に五輪の一大梵字ゐ雕めて傳へて鎌倉北條西園寺入道平貞時平家一門に冥福を祈らんが爲ょ建立せりといふ又平軍に戰死者ゐ集め葬りしもの為して「あつめ塚」なり音に近きより敦盛塚といふに至りしといふ平家物語には直實首を包みて大將軍の見參に入れたるよしを書し盛衰記ょは敦盛に尸骸を焚のもとへ真實送り遣したりと見へされはあつめ

塚乃方理ゐ近からんか八棟寺舊蹟内乃清盛塔も貞時乃建設ゐかゝると言へは貞時の建てしといふて眞を得るものといふへし須磨寺境内の敦盛首塚疑ふへし東鑑に首は六条室町乃臺にあつめ十三日八条河原ゐさうせしと見ゆ

一休

昔斯地有戰場名流血染殘嫩木櫻、須磨浦風散花夕、恰如熊谷打敦盛、

音は絶ぬ青葉の見にしことし竹　　籬島

ほたろ火やまねく扇乃風のまへ　　衆雲

敦盛蕎麥

何れ此時より始まりしもなるやさだかならねと昔はいと大なる店にて女あまた出て左ゝ歌を聲高らかに唱しつゝ行人坂呼ひ留めしよし今は敦盛塔の前に小店を構へ僅ゝに蕎麥を鬻ぐのみ

ゆばは敦盛あんばいと義經盛は熊谷ゐ大茶碗に鉄枴やまもり夫を知つゝ九郎判官うどんと色乃白い玉織姫酒は一ゐ谷源平躑躅ゐもろはく熊谷ゐ大盃て一ばいゐめは顔は辨慶座敷は千疊敷泉水は帆掛船紀州熊野浦まてやりッぱなし お茶てせつたい薩摩守さゝ乃み御遠慮ゐれ方は惡七兵衛喰にげゐら武藏坊辨慶草鞋は熊谷じんばゐわらじ破れるまてを受あい

松際旗亭蕎麪香、山當人面古城墻、分明走狗將窮兎、誰把殘杯酹九郎、

頼山陽

泉水井

石塔乃上乃台にあり其の故記せる書見あらざればいかゞはせん

界川

敦盛塔より西四五町ばかり所に流るゝ小川をいふ攝播両州ばかり境にして西播州鹽屋み接近に

蝸牛つのふりわけよ須磨あかし　芭蕉

この句より蝸牛乃里ばかり名あり

須磨簾

昔西須磨は家毎み表乃方に簾を垂れしといふ細き竹を櫻櫚縄もて束ねさるもばかりして今もこの簾を垂るゝ家あり里人傳へいふ昔一乃谷ばかり城未ゐならざる時大宮人安徳帝を奉ぶて此里乃海士乃笘家をたゞはし行宮となし給ひしとき家毎み翠簾をかけしより遺風今み存せしとかや

朧夜やことをさら須磨の古たれ　既白

藻鹽磯馴味噌

麥麹み小量ばかり豆を加へて製しさるもばかりみしてこれ地乃名物なり須磨の家々に自ら製してたくほふ傳へて行平の教にしもの乃といふ

すまば浦わさとも侘て磯馴味噌鍋の行平菓子の松風　雜島

潮雜水

此里の家み食しけるとゐんこは潮を以てかゆを爲せしものなり

佗ぬれは身にしむはかりむまかりきれまの麥みそ潮雜水　風月庵似雲

是より須磨以東の古跡の大略次附記して讀者の便に備ふ

聖靈權現

東須磨より天井川を渡りて大手村拔行かは程なく街道の左にあり熊野權現を祭る聖靈は熊野證誠權現の誤りとかや例年祭日ふ降雨あるを以てちよぼ〳〵權現の名あり

桂尾山勝福寺

聖靈權現の後ろみあり本尊は聖觀音長三尺五寸弘法大師の作なり永延二年證樂上人の建立ょ係る寶物あまたあり

錫杖　弘法大師の作　十六羅漢　吳道子の筆　両界曼荼羅　弘法師の筆

釋尊文殊普賢　漢顏輝の筆　大般若經　唐本清盛寄送　甲冑龍の王　平知章着

神撫山禪昌寺

勝福寺の北ょ山ょ麓にあり本尊聖觀音安阿彌乃作といふ延文年間正續大祖禪師の開基なり庭内木犀ありしと今は見へぬこと開基和尚唐より移植せしものょしうしろの山を神撫山といひしは神功皇后岩上ふ座し給ひて巖を撫てしう由來すと或は完光和尚こゝに坐禪の時神人來つて頭を撫てしふ起因ととなん境内丹楓いと多しこゝに紅葉を賞ぬ最も妙なり

本尊は釋迦か阿彌陀か紅葉かな　飄水

蓮の池

聖靈權現より東しせえ街道に傍み池ありこれをいふなり重盛乃家臣蓮池權頭家綱戰死せし所なるを以てこの名ありかの建武に戰に足利直義か楠乃軍兵に追かけられ危き所を藥師寺十郎次郎の爲めに助けられし所も亦この池の堤なり

越中前司盛俊墓

名倉に池の傍よありこのあさりは實に源平兩家血戰の衢なり盛俊か猪俣則綱み討ゐれさるは平家物語よも明かみ見ゆ

長田神社

尚ほ街道より東せえ左乃方にあり長田乃里とて名高き地なり代事主命を祭る攝社末社六祠あり延喜式に八月十八日長田西代東尻池西須磨六箇村乃生土神を見ゆ

三代實錄乃も長田の神み從五位上より授け奉るとあり今は官幣小社に列せらる日本記にいふ神功皇后外夷を征服ち翌年難波津よ歸られし時船進まぜ依て占ひとふか事代主皇后に誨て曰く吾を御心乃長田の國よ祠れと則ち葉山媛を以つて祭らしむ云々村上天皇寄附の石燈籠は拜殿の西みあり淳和帝に納められさる神鏡其他賴朝尊氏等も神輿神鐘を納むと云ふ又神功皇后三韓より携へ歸らせ給ふ不滅貝とん呼へる神寶ありて安產の靈應漁釣の利應ありと今は運乃神と稱し一月一日はもとより毎月一日には商估藝妓なと詣て〻福利祈るものいと多し

是より順次北み向は〻街道の兩側に木村源吾重章平通監物太郎賴方平知章等乃墓あり更らに駒ヶ林み向は〻淀繼橋、源氏松、薩摩守忠度の塚あり東尻池よは句梅、眞野里、眞野浦、眞野池、眞野繼橋なとあり和田の岬に至りなは建武の戰尊氏の兵船に矢放ちて世み譽れをのこせし本間重氏遠矢の事を思ひ出るなるへく古人か「根をとめて和田にわさり波漕きくれは淡路の島に月そかくれる」と讀まれさ

る輪田濟に至りなゝ延喜山よりほり安德帝内裏蹟を吊ひ濱りさひしかは眺望ふ富む和田小松原西行か「きひぬへき法乃ひかりの灯をかゝくる和田の御崎かりけり」と讀まれある平相國建立の燈籠堂の古蹟及ひ和田三石、和田神祠等あり又元弘三年後醍醐帝隱岐より還奉ゝ給ひし時龍駕拔駐められしと太平記に載せゝる嚴禪寺あり北條貞時の建てゝる清盛塔世ふ名高き築島ゝ築島寺或は湊川或は湊川神社或は廣嚴寺ありかく筆し來れはそゝ際限なく筆乃擱ひへき次ゝらひ原と須磨誌ふしあれゝ編者はその大要を記しこゝに此誌の終りを告く

須磨誌畢

人力車賃錢表

神戸	金九錢	須磨寺	金三錢
兵庫	金八錢	一の谷	金三錢
郵便局	金四錢	療病院	金四錢
明石	金拾貳錢		
境川	金六錢	鹽屋ホテル	金八錢

瀧車賃金表

左ニ示シタルハ須磨驛ヨリ各驛ヘノ下等賃金ニシテ上等ハ其三倍中等ハ二倍ナリ

神戸	金六錢	消費時間	二十分
兵庫	金六錢	仝	十四分
舞子	金四錢	仝	十四分
明石	金九錢	仝	廿八分

四人乘馬車賃錢表

神戸居留地	往復	金壹圓八拾錢	片道	金壹圓三拾錢	
相生橋	往復	金壹圓三拾錢	片道	金九拾錢	
湊川	往復	金壹圓	片道	金七拾錢	
柳原	往復	金九拾錢	片道	金六拾錢	
須磨寺	往復	金貳拾五錢	片道	金拾五錢	
海月館	往復	金貳拾錢	片道	金拾貳錢	
保養院	往復	金貳拾五錢	片道	金拾五錢	
境川	往復	金四拾錢	片道	金貳拾五錢	
鹽屋ホテル	往復	金八拾錢	片道	金五拾錢	
滝ノ茶屋	往復	金九拾錢	片道	金五拾六錢	
舞子	往復	金壹圓三拾錢	片道	金九拾錢	
明石	往復	金壹圓八拾錢	片道	金壹圓四拾錢	

須磨驛ヨリ各地ヘノ里程表

布引	三里	神戸	二里	柳原	一里三十町	長田神社	一里
駒ヶ林	三十町	境川	二十町	舞子	二里	明石	三里

須磨浦療病院概則

旅亭及下宿料

旅亭	一日 三拾錢以上五六拾錢位	下宿	四圓乃至七圓位

地價

山手	一坪 金貳圓乃至三圓	濱	同 金貳圓五拾錢乃至五圓

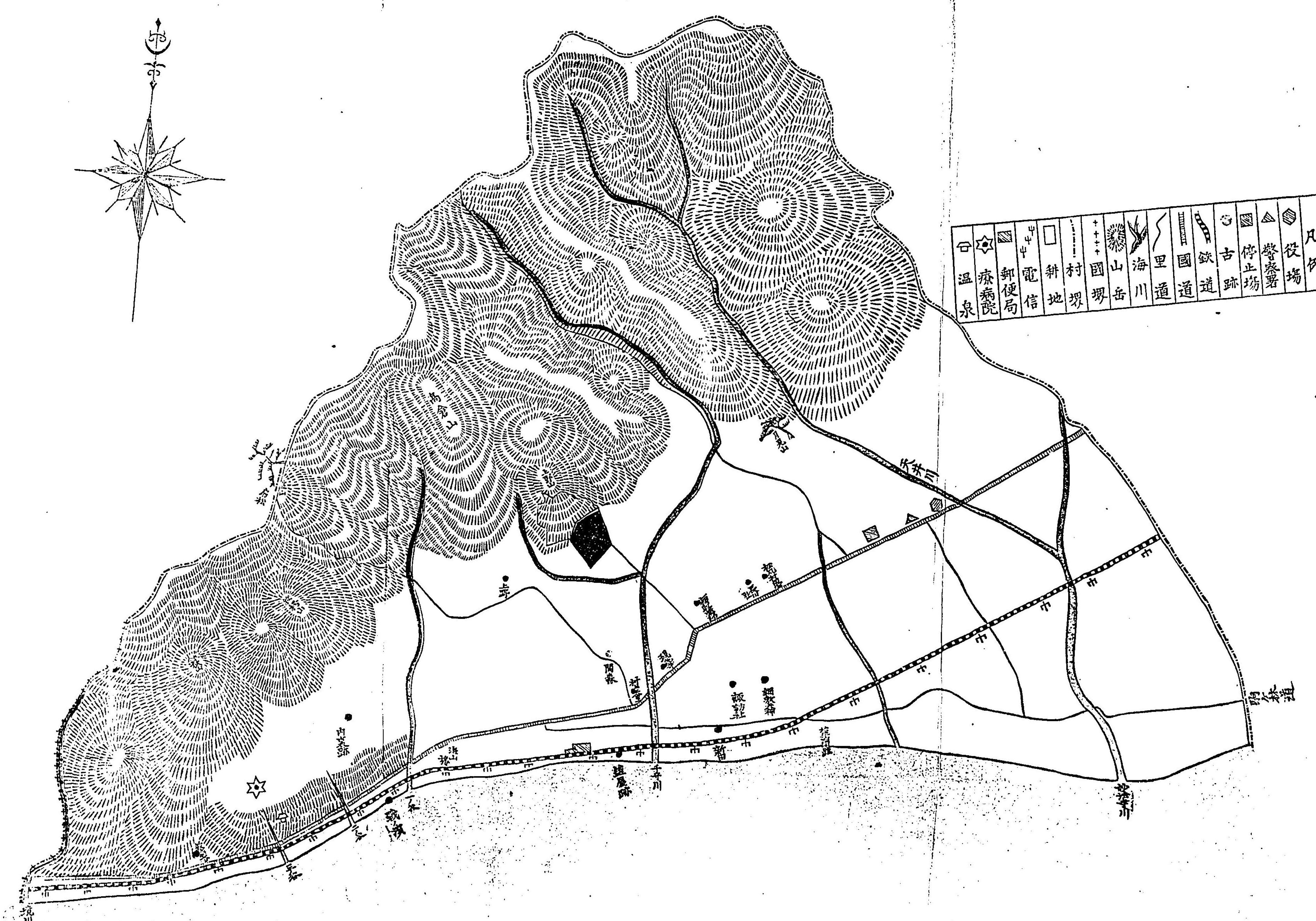
賄料

和食	一日一人前 金六拾錢	洋食	一日一人前 金壹圓五拾錢
保健食料		一等	
一等食料	同 金廿七錢	二等	同 金四拾錢
二等食料	同 金廿壹錢	三等	同 金三拾錢
三等食料	同 金拾五錢	牛乳	一合 金貳錢五厘
白粥	同 金貳錢		

釣舟

一日六拾錢　船頭一人道具一切付

藥價ハ藥品元價ニ試驗料調劑料ヲ加算シ帝國醫科大學摸範藥局ニ倣フ診療料ハ初診ノ際五拾錢以上ヲ納メ診察券ヲ受取リ通院者ハ其診察券ヲ納メテ診察ヲ受クル入院料ハ壹圓乃至貳拾五錢ノ等級アリ左ニ賄料ノ大畧ヲ掲ク


凡例
役場
警察署
停止場
古跡
鉄道
國道
里道
海川
山岳
國堺
村堺
耕地
電信
郵便局
療養院
温泉

明治二十六年七月六日印刷
同　年同月十三日發行

定價金貳拾錢

編纂兼發行者　上原勇太
香川縣香川郡安原村大字安原下三百拾番戸

印刷者　新居政七
香川縣高松市大字濱町百貳番戸

025504-000-8

15-215

須磨誌

上原 勇太／編

M26

ADC-2969